

## 2017年度学校評価（慶應義塾湘南藤沢中・高等部）

本校の教育理念 創立者福澤諭吉が唱えた「独立自尊」を教育理念とし、社会の先導者の育成を目指している。本校は1992年に開校した中高一貫6年制の男女共学校である。情操豊かで、創造力に富み、思いやりが深く、広い視野に立って物事を判断し、社会に貢献できる人、知性・感性・体力にバランスのとれた教養人の育成を教育目標としている。

本校の特色 基礎を確実に身につける、きめ細かな指導を基本とし、語学と情報リテラシー教育に力を注ぎ、「異文化交流」と「情報教育」を教育における大きな柱としている。本校では、帰国生入試を経て入学してきた生徒が中等部では約20%、高等部では約25%という高い割合を占めており、異文化の交流が自然な形で学校の中で生まれている。二人担任制を導入し、きめ細かい生徒対応を目指している。

## 2017年度総括

### 教科教育活動について

各教科一貫校の特性を生かし、中等部は基礎的知識の習得、高等部では習得した知識を基に論理的思考や表現力を養う活動を行い、中高で継続的、発展的な教育内容になるよう配慮している。

今年の単年度評価の内容については、複数の教科で前年と同じ課題が報告されている事からも、課題解決の難しさが推察される。中期的な課題について2019年初等部生受け入れに向けた人的、物的整備について、検討から導入さらには運用方法にまで進んでいる事が分った。

英語科では2018年度の1年生から、新しい分割クラスを設け教育効果を高める取り組みが報告された。

本校の課題として、入学時点での学力差、異なる文化的背景による知識の差があげられるが、数学科からはIT機器を利用し能力に応じた問題に取り組ませる事で解決を図る案が示された。

学習指導要領改訂全面実施（中等部2021年/高等部2022年）の対応についても関係教科では検討が始まっている。

### 委員会活動について

各委員会は、本校の教育目標が達成されるよう設置され、全ての教員が参画している。毎年各々が管轄する教育場面において、生徒の安全や、教育効果を検証し評価している。

委員会の報告書でも横浜初等部受け入れを意識した課題が報告されている。広報委員では内部進学者に向けた情報提供の必要性、コンピュータ委員会では、初等部とをつなぐ情報ネットワークの構築があげられている。施設委員会や教務委員会、新カリキュラム委員会からは、時代の変化に対応するための教育環境整備の取り組みが報告された。

芸術鑑賞委員会や各学年の旅行など、外部機関との調整が必要な委員会では多忙な業務の中で苦慮しながら実施している様子がうかがえる。

生徒係からは情報端末の取り扱いや、自転車安全講習会が今年から実施された事など、社会で問題となっていることに対応した取り組みが報告された。

昨年同様、施設やクラブ運営などハード面での改善、拡充を問題点としている委員会では、引き続き要望を出していることが報告された。2019年に向けた制度や施設についてより詳細な検討が各委員会で進められている。

### 保護者からの評価について（保護者会アンケートより）

学校評価の一環として、保護者アンケートを毎年実施している。

2017年度は7月（中等部のみ）、10月（全学年）の保護者会でアンケート調査を実施した。

学校の教育活動全般に関していただいた意見（自由記述）合計199件を集計し、意見が多かったものを以下に記す。※一人の回答内で複数の意見が含まれているものは、回答に占める意見割合の大きいものを一つ採用し分類した。

学校全体の制度や運営についてのご意見は89件。意見が多かったものは、通学バスに関して（26）、保護者会（19）、荒天時や学校HP等、学校からの情報提供に関して（14）、食環境に関して（9）、であった。

学校の教育活動に関するご回答は55件で、授業参観に関するもの（11）、成績評価に関して（9）などがある。3期制移行に伴い、試験回数など”試験に関して”が14件あった。

クラブ活動に関しては20件、施設に関しては24件であった。

### 前年との比較

総回答数に対する割合で前年と変化が大きかったものは、増加しているもの「通学バスに関して」「情報提供に関して」「下校時間に関して」、減少しているもの「旅行」「英検」「留学」であった。

”課外活動で成果をあげた生徒の終業式での報告”、”病院開設に伴う通学バスへの影響”など、情報提供の不足から誤解や不安を持たれている事が分った。

2017年度年度学校評価（慶應義塾湘南藤沢中・高等部）

教科における自己評価

評価方法 年度当初に各教科の学年、分野毎に授業担当教員が授業計画と目標設定を行い資料を作成する。  
 年度末に、授業計画の実施状況と、目標の達成度について授業担当教員が4段階で評価を行う。  
 A 達成できた(80%~100%) / B ある程度達成できた(60%~79%) / C あまり達成できなかった(40%~59%) / D 達成できなかった(~39%)

総合評価規定 各教科の学年、分野毎の評価を集計し、以下の計算で算出されたものを総合評価とする。  
 各分野と学年の評価を数字に換算 A→4 B→3 C→2 D→1  
 その平均を総合評価点とし、下記基準でアルファベット4段階とする。  
 A 達成できた(総合評価≧3.2) / B ある程度達成できた(総合評価≧2.4) / C あまり達成できなかった(総合評価≧1.6) / D 達成できなかった(総合評価≦1.5)

教科	目標と具体案	結果	次年度への課題と対策案	中期的な課題	前回評価	今回評価
国語	<p>中等部では正しい日本語の表記と基礎的な思考のスキル、生徒各自の発言力・表現力の体得、文章表現の持つ豊かさを実感させることに重きを置いている。</p> <p>高等部ではテキストを批判的に読解するための手法を学習する。生徒が自分で問題を発見し、解決する力を養うことを重視する。</p> <p>日本の伝統文化に関する知識・教養を得ることに主眼を置いている。</p>	<p>中等部では基礎学力の欠如している生徒に対し適宜指導を行うことで、一定の成果が見られた。</p> <p>高等部は副教材を採用することで、論理的な読解力と柔軟な思考力の向上に一定の成果が見られた。</p> <p>百人一首大会・の狂言鑑賞会などを通じて普段とは違った状況で新鮮に受け止めている様子が見られた。</p>	<p>異なる文化的背景を持つ生徒の日本語や国文学史に対する知識と理解の隔たりを同一授業の中で方向づけする。</p> <p>ゆとりの時間や選択、学年行事等、補助的な学習機会の活用について再考する。</p>	<p>2019年度以降（横浜初等部生受け入れ）を見据え、小中高の接続を鑑みたカリキュラムの構築を検討する。</p>	B	B
社会	<p>中等部では地・歴・公民の三分野にわたり、バランスよく基礎学力を習得すること、多角的かつ幅広く社会をとらえる視点を持つことを目標とする。</p> <p>高等部では、学部選択を見据えて各科目高度な専門知識を習得するばかりでなく、習得した知識を用いてアウトプットできるようにプレゼンテーションや論述の機会を多く設ける。</p> <p>例年課題として挙がる「帰国生と一般生の知識量の差」については、ゆとりの講座を設置するなどして対応している。また、授業以外でも、課題などを設定することによって対応している。</p>	<p>中等部では、帰国生を中心に知識の定着がなされていない感触がある。</p> <p>高等部では、アウトプットをできる生徒を育てることができている感触を持つ一方、基礎知識の薄さは否めない。また、学年が変わると、それまでに学習した内容がつかない生徒が多く見受けられる。</p>	<p>中等部では、帰国生の知識の定着に加え、中学受験勉強からの脱却…つまり、即問即答ではない頭の使い方を学ばせ、高等部から大学進学に向けて、筋道を立てられる思考力の育成が求められる。プレゼンやレポート・論述問題により、その課題を解消したい。</p> <p>高等部では、引き続き大学における「研究活動」をターゲットとし、6年「論文実習」の履修前に、論理的思考を養い、客観的論述の訓練をすることが必要になる。</p>	<p>帰国生を中心とする知識の少なさに対し、どう対策を打つべきかの検討が必要。また、2019年度の横浜初等部生受け入れに合わせ、6年間のカリキュラムについて検討を行う。</p>	B	B
数学	<p>中等部の代数分野では、3年間を通じてしっかりとした計算力とともに関数の考え方を理解し解析の土台を身につけることを目標とする。幾何・確率統計分野では、数学的な美しさを発見し論理的思考力を身につけることを目標とする。</p> <p>高等部の4,5年では、全員が代数・幾何・解析・確率統計の基礎を学び、幅広い知識を身につける。6年I類では、経済学などを学ぶために必要な微積分・統計を、II類では同じ分野を理工学部・医学部・薬学部への進学を視野にいれ、より深い内容まで学ぶ。文系・理系を問わず、数学を用いて客観的に物事をとらえ、論理性をもって考えを説明できる能力を養うことを目標とする。</p>	<p>中等部では授業内試験を行ったり、基礎的な計算力に乏しい生徒に対しては適宜補習を実施した。その結果、基礎的な計算力についてはどの学年もほぼ、左記の水準に達した。</p> <p>5年生の記述統計学の授業において、電子黒板とiPadを用いたことで生徒の理解が深まった。6年生のII類の授業において、輪講形式の発表を行ったことで生徒の実践的な能力を高めることができた。</p>	<p>様々な形態で入学する生徒が混在している高校1年段階での学力の差を埋める。そのために、4年生の授業を少人数（20名程度）で展開していく。</p> <p>受け身になりがちな授業形態を改善し、実践的な能力を高めるため、必要な備品・用品（発表用のホワイトボード等）を拡充していく。</p>	<p>2019年度以降、横浜初等部との連携をどのように行い、生徒の数学的な能力を育てていくか検討していく。</p> <p>海外の学校ではIT機器を用いて、生徒の能力に応じた問題に取り組みせることを実践しているところがある。本校でも、情報端末等を駆使して、生徒の能力に応じたよりきめ細やかな教育を展開していく。</p>	B	B
理科	<p>中等部は理科室での実験及び観察、野外での観察を通して本物に触れることを重視し、それらの実験や観察から自然現象の事象や現象についての理解を深め、法則性を見いだすことを目標とする。</p> <p>高等部ではリベラルアーツとしてのサイエンスの基礎と位置づけ、物理、化学、生物、地学の全分野の領域を必修とし、生徒の興味や進路希望に柔軟に応えられるよう選択科目を設置している。これらの授業では実験や観察を通して基礎理論の理解を深め、さらに最新のトピックにも触れ、大学や卒業生との連携し高度な実験にも取り組むことを目標としている。</p>	<p>中等部では実験や観察を多く取り入れる授業を展開し、生徒の理解を深めることができた。</p> <p>高等部では基礎理論を理解した上で、JAXAの見学やPCRの実施など高度な内容を実践できた。</p>	<p>帰国生で、入学前に理科を学ぶ機会が少なかった生徒に対しての配慮をもう少し手厚くできたらよい。</p>	<p>横浜初等部からの受け入れにあたり、初等部との連携を行い、一貫教育を活かした授業展開を行う。</p> <p>また、実験授業などをTTで実施することで、よりきめ細やかな教育を展開していく。</p>	A	B

教科	目標と具体案	結果	次年度への課題と対策案	中期的な課題	前回評価	前回評価
音楽	<p>中等部は基本的な力を養うことに重点をおいた。歌唱（合唱を含む）、リコーダー（基礎からアンサンブル）、楽典の学習をした。名曲に親しみ、表現および鑑賞を通して、音楽活動をする楽しさを味わうことを目的とした。</p> <p>高等部では、より専門的な技術を高める事を目的とした。リコーダーアンサンブル、イタリア歌曲やドイツ歌曲などの独唱、ギター演奏、西洋音楽史（4年）や作曲（5年）などを通して音楽の本質に触れることを目的とした。</p>	<p>中等部では、初めてリコーダーに触れる生徒や初めて楽典を学習する生徒に適宜指導を行うことで、一定の成果を得ることができた。</p> <p>高等部では個々の能力に応じた、個人差はあるが一定の成果を残している。</p>	<p>中等部では後期の合唱コンクールの後に、練習の過程を振り返り、自省させる時間を確保できていない。行事予定の改善など、より効果的に学習できるように再考したい。</p> <p>高等部は、授業で利用できる場所が限られているので、実技に関してグループで練習できる環境をもっと確保し、十分な練習時間を確保したい。</p>	<p>授業で使用する機器の計画的入替を行い、よりよい環境で音楽鑑賞や音楽史に関連した授業を行えるようにする。</p>	B	B
美術	<p>身近な物や風景をモチーフとし、絵画や塑像の基本的な制作技術、またそれに伴う観察力の成長を促す。また与えられたテーマから自由に発想し、そのイメージを作品として成立させる能力を養う。</p> <p>中等部段階では経験のある素材を使用し、基礎力の向上と表現の幅を広げる。</p> <p>高等部では専門的な素材を使用し美術の知識を深めながら作品の成立を目指す。年代に応じて技術や素材を発展させ幅広い経験を得ながら、豊かなイメージ力と再現能力を養う。</p>	<p>基礎的な能力の向上は見られた。しかし指示された事項のみを実行し、自発的に思考し展開する能力は乏しく、新たな発見を促すまでは至っていない。</p>	<p>使用する用具、素材への基礎的な知識の定着を向上させるため、課題ごとの狙いを明確に伝える。また既成概念に縛られない自由に発想が出来るように参考資料を用意しイメージの幅を広げる。</p>	<p>横浜初等部生の受け入れを視野に入れ、施設の使用方法を含めたカリキュラムの再構成を考える。</p>	B	B
体育	<p>中高共に授業の安全な実施を前提に、体を動かす喜びを体験し、生涯にわたって明るく豊かな生活を営む為の基礎作りを目指す。特にケガをしない配慮と危険予知できうる活動については再検討し、ケガをしない体作りを目的とした、基礎体力の強化に加え、体のバランスや調整力を養う運動も取り入れる。同時に安全に関する知識と配慮についても学ぶ機会を設ける。道徳教育的側面も意識しながら集団の中での態度、姿勢についても指導し、バランスのとれた教養人育成に教科として貢献する。</p>	<p>中等部では、体を動かす楽しさや、集団での協調性・責任感の重要性を伝える事が出来た。高等部では、授業を主体的に捉え安全且つ集団としての活動を意識しながら行うという理解が深まっている。</p>	<p>中高共通で、体力向上と事故防止を重点課題とする。この課題について体育や保健の授業で取り扱い、自ら安全に配慮し、行動出来る生徒を育成する。</p>	<p>横浜初等部生の受け入れを視野に入れ、施設の使用方法を含めたカリキュラムの再構成を考える。</p>	B	B
技術	<p>実践的・体験的な学習を通じ、実際に必要な知識と技術を習得させ、生活する能力と実践的な態度を育てる。一年生で、情報に関するもの。二年生で加工分野で製図・木材加工。三年生で、エネルギー変換の電気・加工に関して金属などを扱っていく。</p>	<p>基本的な能力を身につけることはできた。個人で能力の高い子どもは、多い。</p>	<p>生物育成に関する分野の導入を検討する。</p>	<p>横浜初等部受け入れにより、人の手配や施設（作品管理棚）増設の検討などが必要。</p>	B	B
家庭	<p>中等部では生活に関わる基本的な知識・技術の習得をめざす。栄養や衣服の材料、管理のしかた、子供の成長と発達、住環境の整え方などについて学び、調理実習や衣服制作など実践的な実習を行っている。</p> <p>高等部ではさらに資源やエネルギーの効率的な利用について考え、持続可能性を意識した生活ができることをめざす。また、子供や高齢者など様々な世代の人々についての理解を深めることをめざし、妊婦体験実習や高齢者体験実習などを行っている。学んだことを実生活に生かせるように考えさせるグループワークを行う。</p>	<p>おおむねまじめに学習し、基本的なことは学習、実習できたとと思われる。一方で興味、関心に個人差が大きく、レベルの低い生徒もいる。特に実習は、説明を聞いて自分でしっかりできる者と、注意力散漫で失敗したり、きちんとできない者の差が激しかった。本校生徒の特徴であるが、勉強さえできれば良いという考えがあり、実習後の片付け作業などはできない者、やるうとしない者が多い。中等部の授業ではアクティブラーニングを取り入れて行えた。</p>	<p>実習については精選されているが、授業内容については、より興味関心のある内容を取り上げるように工夫する余地があり、アクティブラーニングによる学びを増やせるようにしたい。また、自ら進んで使用後の教室の美化を行えるよう指導していきたい。</p> <p>年々、生徒たちの生活力、実践力が低下していく中、特に1、2年生の実習を40人一斉指導で行うのは厳しくなっている。実習については、分割クラスか、補助教員をつけて行えるようにしたい。</p>	<p>実習の授業がより充実して行えるよう、施設、設備面の整備が望まれる。もともと十分な機能を持っていないうえに、老朽化も進んでおり、事故が起こる危険性がますます高まっている。新設備の導入を申請しても、まずは補修工事に対処すべしとされるのであるが、それもいつに話が進まない。</p>	B	B



教科	目標と具体案	結果	次年度への課題と対策案	中期的な課題	前回評価	前回評価
情報	<p>中等部では、基本的なコンピュータの使い方（タイピング、文書作成、表計算、プレゼンテーションの資料作成）と、プレゼンテーションやポスターセッションを通して、発表のスキルを身に付けさせる。また、マインドストームを利用したプログラミングを通して、センサーの仕組みや身の回りにおけるプログラムによって制御されているものに興味をもたせる。</p> <p>高等部では、DTV、DTPを通して、物事を表現する手法の幅を広げるとともに、物事を発信する力、人に伝わるものの作成方法を身に付けさせる。また、プログラミング作業を通じて、論理的思考を養い、そして知的財産、著作権、個人情報、ビッグデータなどをキーワードとしながら、情報化が社会に及ぼす影響について理解を深める。</p> <p>中等部・高等部ともに、クラウドを積極的に利用していく。</p>	<p>概ね学年に応じたスキル知識が身につけていると感じている。クラウドに関しては、授業で得た知識をもとに、他教科、委員会活動、クラブ活動等で積極的に上手に利用している場面が増えてきた。総合的な時間や他教科と連携した授業も展開することができた。</p>	<p>4年次から入学した生徒と、中等部から在籍している生徒の基本的なコンピュータの使い方（タイピング、文書作成、表計算、プレゼンテーション）、物事の表現力等のスキルに差が生じているため、その差を埋める対策が必要だと感じている。5年次の授業内容に関しては、情報技術の変化に応じて取り組む内容を柔軟に変えていく必要がある。</p> <p>3年次で取り組んでいるマインドストームを利用したプログラミングに関しては、機材の不具合がみられるようになったので、新しい機材の検討が必要である。</p>	<p>中等部は、横浜初等部の取り組みに沿ったカリキュラムの再構築、高等部は、発展し続けている情報技術に合わせて内容を変えていく必要がある。</p>	B	B
英語 (一般・β)	<p>中等部、高等部共に英語はコミュニケーションの道具であるという基本理念に基づき、英語での情報を理解するReceptiveな言語能力と、また英語で自分の考えを発信していくProductiveな言語能力をバランス良く育て、英語を実践的に使うことができる人を育てることを目標としている。</p> <p>中等部では、小学校での英語学習習熟を考慮せずに、アルファベットから教え始め、3年間で文科省が定める文法事項と、それらを発展的に用いた様々な実用的表現、基本的な語彙を身につけることを目標とする。3年次にはパワーポイントを利用した英語での日本文化を紹介するプレゼンテーションができるようにする。</p> <p>高等部では英語で情報を発信していくことにも重点を置き、4年でSpeech、5年でDebate 6年でDiscussion/ Drama / MUNを実施している。Presentationを行う機会も豊富に設けている。原書や英語でのニュースなども教材として扱うことで、できるだけ実践的な英語力を高められるように工夫している。英語で情報を読み取り、それらを土台として自分の意見を書いていくAcademic Writingの能力を高める取り組みも行っている。</p>	<p>中等部では概ね基礎的な英語力がしっかり身につけていると感じる。中学2年の段階から単語学習帳を使用することで、生徒の語彙力の強化に早くから取り組むようにしており、一定の効果があつたと感じる。</p> <p>高等部では日常会話レベルの英語力を超えて、Academicな英語運用能力が身につけていると感じる。高校3年では原書を使ったReadingの授業により、一般的な教科書には出てこないような実用的英語表現に触れたり、語彙力を強化することができた。またAcademic writingの授業を通じて、英語で他者の意見の要約を書く力や、他者の意見と取り入れながら、自分の意見を説得力ある形で表現していく力を養うことができた。</p>	<p>中等部入学時の、生徒の英語学習歴は多岐にわたっている。海外の日本人学校出身者がいたり、また小学校でかなり学習を進めていたりする生徒もいる。より効果的な授業を行うには、さらにクラスを細分化する必要がある。次年度の1年生より、2クラス合同で3分割（2レベル）で行っていた授業を、2クラス合同で4分割（3レベル）で授業を行うようにし、帰国子女のレベルではないが、ある程度英語の学習経験がある生徒のレベルに合ったクラスを新設する。</p> <p>高等部では既習の語彙、文法事項を使ってSpeech, Debate, Discussion, Presentation, Academic writingなどを行い、自分の意見を発信していく能力を高めることももちろん大切だが、意味を優先するあまりに生じる文法的誤りを、見過ごしたままにせず、文法的正確さを高めていくための取り組みを、本格的に行うこともまた重要である。</p>	<p>家庭学習時間が不足している生徒への課題の出し方、予習復習の仕方self-study habitをつけさせる工夫が必要だと思われる。</p> <p>次年度の1年生より、帰国子女レベルではないが、既にある程度の英語力を有している生徒のためのクラスを新設するので、そのクラスに属する生徒の英語力を、3年間で帰国子女レベルまで引き上げていけるように、カリキュラムを構築していく必要がある。</p> <p>横浜初等部受け入れに伴い、本校での6年間の英語カリキュラムを再構築していくことが求められている。</p>	A	A
英語 (帰国・α)	<p>Writing and grammar: Students will become proficient at writing a range of academic essays culminating in 1500-2000 word research papers in the sixth year. Reading and vocabulary: Students will improve vocabulary knowledge and reading level by studying a variety of books typically used in schools in English speaking countries with the same age group. Sixth year students will study Shakespeare. Speaking and listening: Students will become confident with spoken English and be able to make professional presentations in English and debate on increasingly complex subjects. Sixth year students will participate in the Model United Nations.</p>	<p>The majority of Alpha students reach the desired level of English by the time they graduate. This is confirmed by the results of external exams such as TOEFL and contests such as the Keio Academic Writing Contest and national speech contests. In recent years, a growing number of students are enrolling in the PEARL and GIGA programs at Keio University, both of which are taught exclusively in English.</p>	<p>The returnee English course overview documents together with course plans and feedback suggest all teachers are teaching to the curriculum.</p>	<p>The arrival of Keio Elementary School students in 2019 intake poses a number of challenges and opportunities for the English department. While a decision has now been made to divide junior high English into three levels, maintaining the level of high school returnee courses with reduced intake as of 2022 is a challenge we must address.</p>	B	B

# 2017年度学校評価(慶應義塾湘南藤沢中・高等部)

## 2. 各委員会における自己評価

評価方法について 当該年度の始業までに、運営計画と、3～5項目の目標設定を行い資料を作成する。年度末に計画の実施状況と、各目標項目の達成度について各委員会の構成教員が、A～Dの4段階で評価する。

総合評価規定 目標項目における評価点の平均点を算出し、以下の基準でアルファベット表記をする。  
A 達成できた(80%～100%) / B ある程度達成できた(60%～79%) / C あまり達成できなかった(40%～59%) / D 達成できなかった(～39%)

委員会名	目標	具体案	結果	次年度への課題と対策案	中期的な課題	前回評価	今回評価
生徒係	1). 気品の泉源・知徳の模範となる塾生を育てる。 2). 学校行事の円滑なサポート 3). 自宅外通学者の生活指導。 4). 防災意識の向上。災害時に生徒自身が的確に対応できる知識の習得。交通安全意識の向上。 5). 防犯意識の向上と共に、情報機器・スマートフォンの正しい活用方法を理解する。	1). 生徒の公共交通機関利用マナーなど、規範意識の向上。 3). 一人暮らしの会の実施 4). 防災訓練の実施(帰宅方面別の設定/地震を想定した訓練) 自転車安全講習の実施(1・4年生 今年度初) 5). 防犯講演会の実施(1・新入4年生/男女別の形態では初めて) 1年生ロッカーにスマートフォンを導入。 6年生に加え、5年生にも南校舎での情報機器利用を解禁	1). 教員全体が、年4回バス乗車指導に取り組んだ。本校生徒の整列マナーは向上していると感じられる。一方乗車中のマナーに対する苦情は時折寄せられ、全体への注意喚起を対処的に行った。 本年度も年間を通じて、帰宅時の臨時バスが設定され、混雑が少し緩和された。 湘南慶応病院の開院によるバスの混乱が心配されたが、さほど影響は無かった。 3). 生活の具体的な問題点や解決法などを、先輩から後輩に情報提供する場を設けた。 4). 特別教室での授業中に地震が発生した想定でを行い、防災意識を高めた。 自転車安全講習は今年度から新たに始めた。 5). 防犯意識を高める点では一定の効果があった。スマートフォンの扱いについては引き続き継続的な指導が必要である。	1). 生徒ひとりひとりが問題意識を強く持ち、生徒主体で規範意識向上に向けての活動が始まる必要がある。 バス乗車指導に関しては全教員が共通理解を深められるように、引き続き学年毎に指導をお願いする対策をとりたい。 2/3). 自宅外通学者の生活指導、学校行事の円滑な運営のサポート、災害の意識を高めるとのことについては、現状の取り組みにおおむね目標が達成されている。 4). 新入生に対して継続的に自転車安全教育を行い、自転車通学の申請を緩和したい。 5). 引き続き5・6年生には情報機器を有効活用できるように、南校舎での利用を認める。 全校生徒に財布やスマートフォンの貴重品のロッカー管理の習慣をつけるよう継続的に指導する。 中学生には入学準備会や保護者会を通じて、保護者への継続的な啓蒙を行う必要がある。生徒には学校ではスマートフォンはロッカーに入れて施錠するという指導を引き続き徹底する。スマートフォンケースの支給は中1・中2に拡大する。 新入生に対しての防犯講演会を継続する。	1). 生徒の通学時間帯の直行便増設を、引き続き紳奈中に働きかけていきたい。一般客や大学生の割り込みも散見され、抜本的な解決には登校時も下校時も利用バスを分けることが必要である。	B	B
新カリキュラム	1.2020年度からの新学習指導要領への対応 2.選択授業の見直し	2.高等部生向けの「アカデミックプログラム(仮称)」の提案	2. 活発な議論が行われ当初の案からの修正を検討することになった。	1.理念と学期制の議論を元に、文科省の定める2020年度からの新学習指導要領への対応を検討し、各科目の学年配当を考える。	世界で活躍する生徒を育てるために、各教科からの意見を集約し、教科の学年配当を定めて、少人数授業の展開を積極的に取り入れる方法を検討する。	B	B
文化祭	1. 教科、文化系クラブの活動や、クラス企画の発表を通じて、本校の教育成果を示す。 2. 発表内容はテーマに沿った「文化の薫り」が感じられるよう留意する。 3. 安全と省資源、節電、ゴミの減量に対する配慮を心がける。	1. 新校舎建設に伴い、避難経路を確保する必要があるため、屋外企画は実施しなかった。ステージ企画についても、避難経路の確保には十分留意した。 2. 文化祭のテーマを重視した企画内容の徹底。企画チェックの強化。 3. 文化祭実行委員の数を減らし、仕事内容の充実を図る。劇企画についての舞台設営・照明に関する安全性の強化。	今年度の来場者は、8030人(1日目:3514人/2日目:4516人)であった。企画内容については、劇舞台にプラスチックレフトを用いたことでゴミを減少することができた。また、劇中のライトをより安全な物に変更し、来場者にも安全性が伝わるようにアナウンス等で配慮した。アトラクション企画では、年々、電子機器を使用した企画が増えてきている。中夜祭では、これまで外部業者の音響機器を使用していたが、今年は校内の機器を使用したため、本番前に何度もリハーサルが可能になり、多数の来場者の中、スムーズに行うことができた。2体ステージについての遅延はなく、予定通り行えた。多くのご協力を頂き、無事に文化祭を開催できた。	1. クラス企画内容のレベルアップを図る。 2. PC機器を用いた企画が増えてきているため、台数の制限・企画内容の見直し等を図る。 3. 6年劇企画において、1回の公演で入場できる客数を制限し、安全性を図る。 4. 不審者対策の強化 5. 学校説明会や試合引率で文化祭に携わる教員が減少傾向にあるため、人員の確保。 6. 企画を行う際の、基本的なルールの確認を徹底する。	2017年度同様、2018年度も安全への配慮、緊急事態の迅速な対応の他、生徒に関する個人情報保護を強化するため、安全ルールの遵守が必要。 また、企画内容がマンネリ化しており、生徒自身の創造力・表現力の低下が感じられる。より一層の向上を図るため、企画団体への有効なアプローチが必要。	A	A
教務	授業や試験などが円滑に行われるように事務処理を行う。また、生徒の出欠席の状況を管理する。	1. 授業や試験の時間割・使用教室一覧などを作成する。 2. ゆとり開講講座一覧の作成、および生徒の受講講座の確定作業を行う。 3. 次年度6年生の選択科目の調査を行う。 4. コンピューター委員会と連携して、電子出席簿の運用を行う。	1. 年度当初は、時間割・使用教室一覧などに変更が生じたが、それ以降は円滑に行われた。 2. ゆとり受講講座の確定作業は新たな申込方法に変更して、より円滑に進められた。 3. 6年生の選択科目の調査は滞りなく行われた。 4. 電子出席簿の運用に関して、月ごとの集計方法を改善し、円滑に実践できた。	1. 年度当初に変更が生じないよう、時間割・各教科と連携していく。 2. ゆとり開講講座一覧の作成において、入力方法などに改善の余地がある。 3. 3期制に対応して、業務を見直し、運用していく。特に出欠集計を速やかにできるよう、電子出席簿システムの改善案を作成していく。	横浜初等部の一期生が入学するまでに新カリキュラムを構築する。	A	A
BLS	1)救助の実践を通して、緊急事態の判断・危機管理、生命の尊厳、市民の義務を根付かせる。 2)3年以内の履修で実行能力の低下を防ぐ 3)ボランティア精神の育成 4)教職員の受講率の向上	・講習前に慶應BLS教育の取り組みについて説明する ・指導員の指示に従い技術習得に励む ・講習後、校舎内に設置してあるAEDの場所を確認する ・実際にBLSを行った生徒を表彰する(今年度はなし)	・1,4年ともに、集中して受講していた。 ・教職員の受講数が低下してきた。低下理由に中間試験の採点および、点縮が近づいているため、講習の参加ができない教員もいる。	・教職員の受講数を増やすため積極的な呼びかけを図る。可能であれば、学校行事作成の際、教員が受講可能な日程に合わせられるようにする。 ・藤沢消防の講習会だけでなく、教職員対象に学校医からの「エビベン講習会」や「応急手当講習会」を開催したい。	この活動は、続けていくことに意義があり、塾生塾員誰もが、手をささぐられる環境を目指す。	A	A

委員会名	目標	具体案	結果	次年度への課題と対策案	中期的な課題	前回評価	今回評価
コンピュータ	1. 教員と生徒が利用するコンピュータ、タブレットとその周辺機器の管理及び整備 2. ネットワーク機器の管理及び整備 3. プロジェクタなどの映像機器の整備及び管理	1. 出欠管理の電子化を図るために導入した電子出席簿システムの、安定した使用とさらなる改善点を探る。 2. 教員用、生徒用パソコンのリプレースに伴い、機種選定し、スケジュール通りに導入、置き換え作業を行い、9月以降の授業で利用開始できるようにする。	1. 電子出席簿の運用に関しては教務委員会と連携をして、概ね円滑に進んだ。 2. 教員用、生徒用のパソコンのリプレースが、一部3月にずれこんでしまった。	1. 教室に加え、教室以外の場所についても、IT設備の整備を図る。 2. 電子出席簿システムの改善を図る。 3. 事務室と連携しながら、円滑にリプレース作業が進められるようにする。 4. AVC教室の机、椅子の整備を進めていく。	横浜初等部との連結を見据えた、両校をまたがる情報ネットワーク環境の設計・構築。	A	B
生徒会	生徒の自治組織としての意識を持たせ、それに見合う活動を行う。身の丈にあった活動になるように指導する。	生徒会本部役員は、まずは、内務的なことに力を入れるために、学校生活で問題になっていることを洗い出し、問題解決をはかるよう努力する。	「バス乗車について」「募金運動」など主体的に計画し、他の委員会も協力して活動することができたが、生徒たちの意見を集約しての動きではないことが問題。 各委員会は、年々、活動が洗練されてきている。	本部役員自ら自分たちを「雑用」と述べており、教員からも「行事屋」と位置づけられているように、「七夕祭」や「正月祭」でしか活躍の場が与えられていないという問題がある。 新年度は生徒会長の公約である「意見箱」の設置が施行されるので、本部役員にはそこを突破口に生徒たちの自治意識を高める先導を切っ掛けしてほしい。	ここ数年続いた慶應義塾高校主催の「招待会議」への協賛など、校内で活躍の場が与えられていないので、外部に目がいきがちであるが、まずは、学校内の様々な活動について点検・確認などをし、足下を固め、自治政府の機能を果たす力をつける。	B	B
図書	図書館と教員間の円滑なコミュニケーションをはかめながら、生徒が図書館を有効に利用できる環境を作っていく。次に、生徒図書委員とも協力しながら、図書館利用の活性化をはかる。	定期的に、図書館スタッフとのミーティングを行って図書館の利用状況を把握する。生徒図書委員から、活動の報告を受け、助言することで、生徒と図書館の距離を縮めていく。	生徒図書委員は、ブックカード班や放送班に加えポップ班を立ち上げ、図書館利用についての啓蒙活動を行い、生徒の足を図書館に向けることができた。	昨年度から、生徒図書委員を各クラス1名強制ではなく、希望者のみとしたためカウンター業務の手伝いの出席率がかなり向上した。カウンター業務は生徒図書委員間のコミュニケーションをはかるのに有効だった。	希望者のみでの活動となったので、年度を超えて各種の活動が継続するようになったが、それでも積極的に活動する生徒と消極的な生徒に分かれる傾向はなくなりつつある。全体の活性化のためにはさらなる工夫が必要である	B	B
論文実習	論文作成に必要な以下の点を理解すること。 ・先行研究が集められ、そこに述べられている見解や主張が整理されていること。 ・整理した先行研究を「批判的に」見ること。 ・他者の意見を尊重し、自他を明確に区別する方法を学ぶこと。 ・論文としての形式や体裁を知る。	・4月中には教科書『論文実習』をもとに講義を行い、論文を作成するための姿勢を学ぶ。 ・前期・後期で各1回ずつプレゼンテーションを通じて、「問」と「仮説」、それを結びつける「アブローチ」の論理性、一貫性を確認させる。 ・下書きの査読を通じて、剽窃や形式のチェックを行う。	・安易な素材やテーマを選択するケースが多々見られ、争点を見つけられない生徒がいた。 ・10段階評価になったからか、取り組みが甘さが目立った。特に資料を探すことに対するこだわりがない生徒が多かった。 ・一方で地道に努力を続け、完成度が高い論文を作成した生徒もいた。	研究案の再提出を遅らせ、じっくり考え直す時間を与えたり、成績の割合を明確化し、プレゼンでの質疑応答を活性化などを促した。 ここ数年論文自体の完成度は高いが授業への取り組み方で成績が伸びない生徒が多く見られ、それが課題となってきたが、今年度はほとんどの論文は呼べない作品を描きつつも、残りの40%で評価が高つく生徒が目立った。40%を占める取り組みの部分をもどくに評価するは次年度も考えなければならぬ。	3月半ばに6年生によるオリエンテーションが行われ、それから春休みを挟んで、3週間弱で研究案を提出しなければならぬ。その間に素材を選び、テーマを設定、それに関する資料を読まなければならない。そのため、教員に会うことなく、争点があるテーマ設定ができていない研究案になっている生徒が大半を占める事態になってしまった。5年次の早い段階から、「論文入門講座」のように評価するは次年度も考えなければならぬ。	B	B
国際交流	1) 廃止になった春季英国留学プログラムに変わる新規プログラムの開発・実施 2) 留学希望者、特に男子生徒を増やすこと 3) 18年度実施に向けてカナダのプログラムを確立する。	1) 新規に開発した春季英国留学の回数を重ね、プログラムとして定着させる。 2) 中等部3年生に高等部3年生の留学体験をプレゼンテーションしてもらい、また引き続き国際交流をテーマとした保護者会を行ったり、教員室前の掲示板を有効活用して宣伝する。 3) カナダの学校を決定し、詳細を決める。	1) 第一回春季英国留学プログラムの受入が出来た。 2) 中等部生への講演会をしたことによって先輩の経験談に刺激を受けて、多くのプログラム応募者が増えた。 3) カナダの学校を決定し、プログラムの詳細が決まった。	1) 引き続き年に2回の募集と生徒への宣伝を強化する。 2) カナダの学校の一回目の受入(6月)と訪問(2月)を成功させる。 3) 一人暮らしの生徒が参加できるように、成績偏重にならないように選考方法を見直す。 4) プログラム担当教員の業務引継ぎをスムーズにする。	それぞれのプログラムを充実させる。	B	B
施設	1) 横浜初等部受入れに伴う校舎および体育館の新築工事と、既存棟の改修工事の順調な竣工を促す。 2) クラブ倉庫棟の円滑な竣工を達成する。 3) 女子更衣室の早期設置を達成する。 4) 年度内に生じる施設面での不具合に迅速に対応する。	1) 三田管財部・設計事務所に定期的な協議の場を設け、詳細な仕様や工程上の懸念事項を協議する。 2) 各クラブや使用施設担当者の要望を踏まえ、三田管財部や設計、工事業者と協議を重ねる。 3) 三田やSRCの管財部との協議を重ね、早期の女子更衣室設置の実現を図る。 4) 限られた予算の中で、生じた不具合に対する優先順位をつけ、優先度の高いものから順次速やかに対応する。	1) 新カリキュラムにおいて少人数教育を目指すこととなり、新校舎の教室の多くを分割教室にする大きな変更が生じたが、関係各位のご尽力で工期に遅れが生じることなく進めていくことができた。 2) 各クラブの要望を踏まえた部倉庫棟を年度内に無事竣工することができた。 3) 諸処の事情より、今年度中に女子更衣室を設置することができなかった。しかし、来年度の新校舎等の建設に伴う既存棟の改修工事の中で、女子更衣室を2部屋設置することになった。 4) 必要な工事については迅速に対応することができたと考えている。	1) 2018年度の無事な竣工とその後の円滑な運用ができるかが課題である。引き続き学校と工事関係者で連絡を密にとりて対応していきたい。 2) 竣工はしたが、使い始めると様々な問題やルール违りが必要になってくるのが予想できる。開校以来の新築の部倉庫棟などで有効に利用してもらえよう対応していきたい。 3) 予定通りの運用ができるか、問題が生じれば迅速に対応していきたい。 4) 2018年度は放送設備の改修工事に注力する予定であるが、年度内に生じた施設上の問題について迅速に対応していきたい。	1) 2018年度で一連の工事は終了するが、初等部生が進学L6学年がそろそろ2022年までに施設面での新たな課題も生じてくること予想される。それらの問題に対して長期的視野をもって対応していきたい。 2) 既存の施設も20年以上が経過し、老朽化も進行する。三田の管財部とも連携をとりながら、優先順位をつけて計画性をもって対応していきたい。	A	A



委員会名	目標	具体案	結果	次年度への課題と対策案	中期的な課題	前回評価	今回評価
委員会名 年会誌	年会誌発行の期日の円滑化、及び正確さを目標に	各担当部署に原稿の速やかな提出をお願いした。  校正は各部署に(クラス担任・クラブ顧問等)に再度にわたりお願いした。	速やかな対応をする教員とそうでない教員の差はなかなか改善されなかった。  校正を1人で行ったためまた原稿の提出が遅いため出版までに大幅な時間を要する。 1人2人で行うには無理な作業になっている。  訂正は幾分減少した。	提出期限をわかりやすく表示する。期限を切ることも必要か？  誤植のない完璧なものを目指すべく、検討する。	記録の正確さ・充実  内容のマンネリ化をどう改善していくか。	B	B
クラブ活動運営	生徒が安全かつ有意義にクラブ活動ができるよう、環境および制度を整備する。	①各クラブ活動場所における危険箇所を調査し、安全に活動できる活動環境を整備していく。 ②クラブ倉庫の経年劣化・破損状況を確認し、新規購入・修理計画を立てる。 ③経年劣化が目立つ備品が多く、また、修理が必要な箇所も多い。予算の増額を検討していく。 ④関東大会・全国大会等の補助金額を再検討する。 ⑤人数が少ないクラブ活動についての存続条件を確認した。 ⑥大学アーリーナでの活動に対して顧問付き添いが大学側より求められた。	①備品購入・修理はいくら出来たが、老朽化及び構造上の危険性には、まだまだ対応ができていない。次年度以降も引き続き検討が必要である。 ②一部完了。グラウンド新倉庫種が完成予定。新校舎の建設を考慮し、無駄のないように次年度以降も進めていく必要がある。 ③根本的な改善は図られていない。次年度も引き続き交渉していく必要がある。 ④関東大会、関東大会よりも上位の大会という区分にした。 ⑤完了 ⑥他の大学施設はそのような条件がないので、次年度以降も大学側に理解を求めていく必要がある。	1)危険箇所調査に基づく活動環境整備 2)クラブ倉庫の劣化調査と買い換え 3)経年劣化に対応できる十分な予算配分 4)初等部受け入れ・定員増に向けての課題洗い出し 5)大学施設での活動時の注意事項	1)慢性的な危険性を軽減すべく、施設修理の根本の見直しを申請する。 2)施設・備品老朽化を前提とした予算配分を検討し、申請する。 3)初等部受け入れ・定員増に向けての課題を洗い出し、施設増設・備品購入計画などをたてる。	B	B
広報	本校の広報に関する業務全般の実施計画・企画・実施・評価・報告する。  本校の広報発信の内容・方法・受験生のニーズ把握・広報資源の適正配分・過不足がないかな等について把握し、活動を改良する。	2年後の横浜初等部受け入れに向けての広報について検討する。 点検をふまえ、学校説明会の改良、学校紹介パンフレットの改良、学校紹介DVDの作り直しを行う。(昨年度から継続) 1)HPのCMSを大改良 2)学校紹介パンフレットの改良 3)学校紹介テーマ別ビデオ作成・公開 4)学校案内パンフレットの大改訂 5)学校HPの大改訂 6)学校説明会のスムーズな運営と質の向上	1)HPの改訂を完成・公開した。 3)HPへの公開をめざし、テーマ別ビデオ2本・卒業生インタビュー編5本を完成して公開完了した。 4, 5)業者選定コンペ、選定、打合せを開始した。 6)昨年度に続き、シガポール・大阪においても学校説明会を実施した。 新しい学校紹介ビデオ(6月仮納品版)、生徒の発表・テーマ別プレゼンとも、大好評であった。	1)改良版のHPを公開し、外部評価を受け止め、今後についても検討・改良を進める。 2)HP 改良版への変更 3)HPへの動画コンテンツ掲載の効果を検証する。 4)5)検討・作成・完成公開 6)継続更新	横浜初等部受け入れに向けて内部進学者にも受験生にも学校の良さがわかるように広報体制を充実し、本校の教育目標、内容をしっかりと発信する。  (1)学校説明会 (2)HP (3)学校紹介パンフレット	A	A
芸術鑑賞	人生をより豊かなものにするために、質の高い芸術に接する。3年間のローテーション(クラシック音楽→日本の古典芸能→ミュージカル・オペラなど)で、多様なジャンルに接する機会を設けている。今年度は舞台芸術の年であった。	劇団四季 ミュージカル 「ライオンキング」  四季劇場[夏](大井町)  ・6年生 1月26日  ・4,5年生 2月8日  ・1,2,3年生 2月9日	劇団四季側からの営業活動、公演日の多さ(平日のマチネにも対応)などの事情により、今回の内容になった。ただ、今年度は劇団四季の劇場の多くが改修などに入っていたため、演目の選択肢はあまりなかった。「ライオンキング」ではあるが、演出技法などに見るべき点はあるが、内容的にはあまりにも幼稚か？中等部生にとっても物足りない部分が多々あったようだ。その一方で熱心に見ていた生徒もかなりいたことも事実。	昨年度の流れから、6年生のみ2月に行わなかった。今年度のように3つのグループに分かれると、安価なチケットに多くの生徒を割り当てることができるので、コスト的な問題を解消できる。それでも、今回は予算の5,000円を超えることになった。開催時期は、6年生は12月または1月、それ以外の学年は2月というのは今後も継続すべきと考える。ただし、全学年を対象としたホールを貸し切った公演はできにくくなる。	コストの問題が常につきまってくる。5000円の範囲で演目を考えるが、なかなか難しいというのが現実である。預かり金をもう少し増やしていただくなど、事務室との連携も重要となる。劇団四季特有の問題としては、人数の確定の時期が早いこと(8月末)。短期留学などで確実に行くことができない生徒がいる時期にも関わらず、最大人数で申し込みをせざるを得ない。人数を多少増やすことはできるが、キャンセルはきかない仕組みになっている。次のローテーションの際は劇団四季以外を考慮に入れることも考えるべき。せめて、もっと高度な内容の作品にしないと、高等部生にとっては物足りない。	B	B
自己点検	教科、委員会が、教育活動の内容について評価する仕組みを設け、本校の教育水準が向上し続けるための補助的手段を提供する。また、活動内容の重複や効率性の検証材料を提供することで、円滑な学校運営に寄与する事を目的とする。	各年度における教科、委員会の活動内容をまとめて総括を行う。 各組織の目標設定、活動内容の評価と改善の記録が適切になされているかを確認する。 保護者の学校に対する満足度を測るために、有効なアンケート項目を設定する。自己点検で得られた情報を基に、他教科、他委員会相互の情報交換を促す。公表可能な学校評価資料を作成する。	現行の評価方式になって3年目となる。作成方法が定着し、よりスムーズな書類作成で予定が達成された。しかし作成に向けた組織内での議論が少なく、学校評価が教育活動の改善に寄与してはと言いが難い。保護者アンケートについて回答数は減少したが、有益な意見が多く得られた。	年度末の多忙な業務の中で、評価書類作成の負担をより軽減させる仕組みが必要である。各組織の自己点検自己評価についての議論を促す仕組みも検討していく。保護者アンケートについて、質問項目や記述方法、回収方法について改善や、自由記述の分類方法などに研究が必要である。	各委員会での目標設定や問題意識が、学校全体の将来像と結びつき、さらには横浜初等部との連携も必要となるため、中高の委員会相互だけでなく、横浜初等部とのコミュニケーションも必要である。 外部評価(学校関係者評価)や、卒業生へのアンケート調査については引き続き検討していく。	A	B
25周年記念	2017年に本校が開校25周年を迎えるにあたり、25周年記念事業として何を行うか？昨年度からの継続審議の中で募金活動をどのような形で立ち上げるか？また記念式典・記念品はどうするか？ということを具体的に提案できるところまで形にする。同窓会との連携を図りながら25周年という節目を確認していきたい。	A.募金活動については実施するという前提で、①募金の金額②何に対する募金か③募金対象について検討した。新校舎建設や横浜初等部からの進学の時期を見定めながら設定する必要がある。B.式典・記念誌は今回は行わず、30周年で行うこととする。C.記念品は作成する。D.同窓会には「ペーデー」の企画と25周年事業での新機軸の検討を依頼した。	A.今年度は募金活動を行わなかった。理由は、新しい施設ができることもあり今年度は見送った。次回に向けてインパクトのある募金項目を打ち立てることが課題である。C.記念品について、具体的には在校生・教職員対象に、記念タオルとクリアファイルを作成し、生徒には10月後期最初のHRで渡した。その際、25周年ということで、ロゴを学校HPとHRで公衆した。記念品にロゴをデザインすることで25周年記念品とする。なお、クリアファイルは今年度分だけ国際交流で来校した留学生徒引率教員に差し上げた。25周年を全校生徒に周知してもらうべく次のミニ企画を持った。・施設の変遷を航空写真で紹介(開校時と20年)。これまでの周年行事で生徒に配布された記念品の展示。・会誌の表紙の24年分紹介ポスターの掲示。それぞれを図書室などの協力を得て10月～文化祭時期まで行った。C.11月に同窓会が開催する形で、横浜ホテルで実施した。学校からは懇親会費を教員参加費に充てていただいた。なお、同窓会からはホームカミングデー(仮称)の立ち上げについての企画案を具体化することになった。	A.今年度は募金活動を行わなかった。理由は、新しい施設ができることもあり今年度は見送った。30周年に向けてインパクトのある募金項目を打ち立てることが課題である。B30周年に向けての準備(記念誌・記念式典)D同窓会との連携をよりよいものにしていく。	A.30周年では募金活動を実現すべく、趣意書の完成と内外への周知。課題としては、いつから募金を開始してどのよう周知していくかである。B.30周年に向けての準備(記念誌・記念式典)D.ホームカミングデーの実現に向けての検討	A	A

委員会名	目標	具体案	結果	次年度への課題と対策案	中期的な課題	前回評価	今回評価
1年生旅行	トレッキングや洞窟探検、稲刈りや教材を使った物作りのプログラムなどを通して、富士吉田の自然や歴史、文化を学ぶ。また、これらのプログラムによって集団生活のルールを学び、規律ある行動を身につけるとともに、友達と協力して一つのことを成し遂げる力をつける。	・富士山麓の樹海探検や紅葉台トレッキングを通して、体力を養うと共に富士山周辺の自然や文化について学ぶ。 ・農業体験を通じて富士山麓の産業・生活について考える。 ・飯盒炊きやアドベンチャーゲームなどで、友情を深め、仲間と協力する態度を養う。	天候にも恵まれ、すべての行程をこなすことができた。青木ヶ原、紅葉台では樹海の成り立ちなど、自然について学ぶことができた。農業体験では地元富士吉田の方との交流を行い、農業について考える機会を得ることが出来た。アドベンチャーゲームや飯盒炊きなどを通して、チームで協力して取り組むことの大切さを学習できた。	今年度も、理科にご協力いただき事前学習をすることができ、効果的であったので、来年度も引き続き同様の事前学習ができるようにしたい。 今後、初等部受入れのクラス(生徒数)の増員による宿泊先のキャパシティの問題が解決できていない。 宿泊先は貸切り状態で、ホテルも最大限の対応をしてくれるので、雨天や急な行程の変更等、スムーズな行程の進行が可能である。	雨天時の代替プログラムの充実が今後の課題である。	A	A
2年生旅行	東北地方の自然・歴史・文学・風土を学ぶ。集団行動の意義を理解する。防災学習・復興支援プログラムに取り組む。現地の方との交流を通じて地域文化の豊かさを実感する。	1) 各教科で学習した内容に触れさせる見学地や体験プログラムを用意する。 2) 郷土芸能や郷土料理等を通じて郷土文化への理解を深めさせる。 3) 東日本大震災に関するビデオを見せたり、日本の津波被害に関する本などを読ませるなど、事前学習を行う。	総合学習としての旅行であるということ、集団行動であること、そして被災地を訪問させて頂くことの意味を生徒に理解させて、旅行に臨ませた。その結果、どの見学地でも比較的よく話しを聞き、学習をしている姿勢が見られた。これまで農業体験を行ってきた岩泉町については、2016年台風被害の影響が現在も残っており、訪問することが出来なかった。	1) 旅行後に生徒自身にどのような貢献が出来るかや、地域経済と日本全体の経済の結びつきについても考えさせる。 2) 防災知識が震災の備えとして有効である事を意識させる。  課題：見学が中心となり、中学校2年生の旅行としては活動的な内容が少ない。 1) 岩泉町の体験学習に変えて岩手県立水産科学館/真崎わかめ工場での体験学習を実施しているが、岩泉町の受け入れが再開され次第変更する予定である。	現地の復興が進む中で学ぶ意義の高い体験学習を検討する。また、宮古・田老地区の見学に代わる震災遺構を取り入れたプログラムや、2日目の行程で遠野市後方支援資料館・遠野伝承園の見学プログラムを組み込む行程変更も次年度に向けて検討している。 震災学習の意義や、移動距離の長さを考慮し、訪問地についても検討が必要である。	B	B
3年生旅行	四国や広島島の自然や歴史に触れると同時に、団体行動を通じて親睦を深め、普段の授業では経験できないことを学ぶ。班別行動計画を立てる。事後学習として、1) 松山班別研修を班ごとにA3用紙にまとめ、掲示、2) 実際に広島を訪れたことを作文として提出・関係各教科での事前学習等あり(国語・英語・社会・理科)	・広島平和学習として「1945年8月6日」を読み、レポートを作成する。松山での班別研修に向けて、班別行動計画を立てる。 ・事後学習として、1) 松山班別研修を班ごとにA3用紙にまとめ、掲示、2) 実際に広島を訪れたことを作文として提出・関係各教科での事前学習等あり(国語・英語・社会・理科)	全期間、雨が心配されたが、初日以外は天候に恵まれ、3泊4日の行程を実施できた。全体として、それぞれの場所についての事前学習を活かし、熱心に話を聞き、学習することができていた。特に広島での被爆体験講話では、全員が真剣に話しに耳を傾けていた様子が印象に残る。2日目の班別研修では、全員が時間厳守で行動することができ、各班計画に沿って学び多く充実した時間を過ごすことができた。	龍馬記念館の休館(2017年)に伴って本年初めて訪れた新設の歴史博物館・高知城だが、展示内容が想像よりもかなり少なく、少し時間をもてあましてしまった。次年度は歴史博物館・高知城をやめて、龍馬記念館・桂浜を訪問するようにした方が良さそうだ。	学習する内容に恵まれた場所なので、事前学習について様々な教科と連携を取り合う必要がある	B	A
4年生旅行	北陸地方の各地を地学・地理学・民族学的な視点で観察し、地域の自然と人々の暮らしの関わりについて学ぶ。事前学習と現地での学習を総合した、自発的な探求活動を行う。集団生活を通して、協力し合う態度や規律ある行動を身につける。	事前学習として、しおりの資料を各クラス、班に分かれて作成し、コンペティション形式で掲載資料を選定する。事後学習として、1200字程度のレポートを作成させる。	今年度は、懸案であった集合時間を概ね50分遅らせることができた。幸い雨天に伴う旅程の変更もなく、予定通り旅行を行うことができた。ただ、2日目のクラス選択コースでの体験学習の密度に差があること、また3日目の立山・カルデラコースに時間短縮の要があるなどの課題が認められた。	1) 2日目のクラス選択コースの和紙の体験学習は、他の選択コースに比し充実度が今一つのところがある。 2) 3日目の立山カルデラコースはホテルの掃着が大幅に遅れた。何らかの形で時間短縮の工夫が必要である。	前期末の慌ただしい時期に、事前学習をどのように効果的に行うか。事後レポートを充実させるためにどのようなしかりをするか。	A	A
5年生旅行	京都・奈良・飛鳥の自然や歴史に触れると同時に、メンバーとの親睦を深め、普通の観光旅行では経験できない自己研修をする。	班に分かれて行動計画を立てさせ(plan)、実行し(do)、振り返る(see)という学びを経験する。4日間中3日間は自主研修とする。	今年度は京都→奈良→飛鳥の歴史をさかのぼるルートであった。こだわりテーマを持ったプランニングをたてることで、研修意欲のある生徒の様子が見えた。大きなトラブルもなく予定通り行えた。自主研修により、仲間意識を高めた上、お土産ではない・旅行の面白さに気づいた生徒が多かった。	1) 今年度と同じ 京都→奈良→飛鳥 ルートが良いが、飛鳥に関して、時間・距離を考慮したプランが生徒自身で行うことが困難なため、3日目の自主研修終了時間を早め、バスでまとまって飛鳥エリアを巡回する方向で検討している。 2) 担任による事前チェックの程度。京都、奈良方面への知識や経験にはどうしても差がある。生徒のつくるプランに対して、学年全体で統一感を持たせることは難しい。 3) 引き継ぎ資料として、過去に生徒が立てた良いプランを残し紹介してもよい。 4) 事後レポートの内容。古典などの教員と連携を取りながら、内容を確定する必要がある。 5) 来年度から奈良ホテルの宿泊が再度可能となる。 奈良ホテルの歴史についても事前学習しておきたい。	自主研修メインはいももの、学習の要素をどうするかが課題。生徒の経験が多種多様ななか、事前学習・事後レポートの内容をどうするかについては、毎年悩み続けている。	A	A
6年生旅行	現地で実際に目にする中で、北海道の自然や文化・歴史などについて自発的に学び、理解を深める。	事前学習として見学地に関連したレポートを作成させる。事後学習として実際に見学してきたことを踏まえ、レポートを作成させる。 (1) 函館市内の班別研修 (2) アイヌ文化体験 (3) 札幌での行程は「小樽」「羊が丘・大倉山」の2コースに分け、その後班別自主研修 (4) 「開拓の村」見学・美瑛地区サイクリング (5) 「サケのふるさと千歳水族館」で採卵受精体験	(1) 今年度は天候にも恵まれ、両班とも函館市内・夜景見学は順調であった。 (2) アイヌの踊りや歌を鑑賞し、楽器の演奏体験を行った。 (3) 札幌・小樽での班別自主研修も大きな問題がなかった。 (4) 「開拓の村」では、各グループにガイドの方がついて解説をして頂いた。 (5) 「サケのふるさと館」では、サケの採卵事業に関する解説もあり、学習効果の高い体験学習となった。	総合学習としての旅行にどのような課題を設け、定し、評価していくか継続して検討する必要がある。 (1) サイクリングを行えなかった班は旅行会社の提案により、当初の予定にはなかった立降脚を見学することができた。今後も同様のケースにおいて行えるようにしたい。 昨年度は函館夜景見学が行えなかった班は翌日の早朝に見学した。今後も雨プランとして検討したい。 (2) 2018年度より白老がロトコタンが一次閉鎖となるため、アイヌ文化の学習・鑑賞の機会について検討する必要がある。次年度については、現在の所宿泊先において公演をお願いしている。 (3) 札幌研修において、小樽コースでは札幌への移動の際に電車の使用を許可した。これにより行程の作成に自由度が増したが、他のコースとの格差が生じないように注意したい。 (4) サイクリングでは自転車交通マナーをより徹底させる必要がある。 (5) 解説も含めて、体験学習は効果が高い。次年度も実施をしたい。	より学習要素の多い旅行にしていけるために、旅行先を再検討する必要がある。行先を北海道で継続する場合でも、行程の大幅な変更を考慮する必要がある。バスでの移動が長く、時間に大幅なロスがあることが懸念材料である。同じくバスでの移動が長いとしても、道東方面など自然学習・観光を主眼においた行先などを検討する必要がある。	A	A